氏　　名	恒吉　眞希
学 位 の 種 類	博士(社会福祉学)
報 告 番 号	甲第 108 号
学 位 記 番 号	福博第 10 号
学位授与年月日	令和 5 年 3 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	障害者施設利用者との相互関係に着目した介護職員の「演じる行為」 "Acting" of Care Staff: With a Focus on the Mutual Relationship with Users of Facilities for the Disabled
論 文 審 査 委 員	主査　教授　宮上　多加子　(高知県立大学) 副査　教授　杉原　俊二　(高知県立大学) 教授　五百藏　高浩　(高知県立大学) 教授　西内　章　(高知県立大学)

論文内容の要旨

＜背景＞介護福祉分野の中でも，障害者施設利用者と介護職員は長期的な関わりとなる特徴がある．閉鎖的環境で生活する利用者にとって，介護職員は多くの時間を共にする重要な他者となるが，両者の関係性に関する研究は数少ない．また，介護職員は利用者が求める家族のような役割を演じており，先行研究において，「演じる行為」は経験により選び取った方法であることが示されている．しかし，介護職員の演じたときの状況や思い，利用者との相互作用による影響は明らかになっていない．

＜目的＞本研究の目的は，障害者施設介護職員が利用者との相互行為によって得た役割と，介護職員の「演じる行為」の関係を明らかにすることである．

＜方法＞障害者施設介護職 11 人，他職種 11 人，利用者 7 人にインタビュー調査及び参与観察を実施し，データの多様性を確保した．得られたデータは質的記述的に分析した．

＜結果＞介護職員は【私の関わりが利用者の生活や人生を形成】すると認識し，【利用者を思い私にしかできない役割への使命感】をもち，職員として接する必要性との狭間で，《利用者が求めるままに応じられない葛藤》が生じていた．利用者も職員に演じて接しており，利用者と介護職員の演じる行為を通した相互関係が明らかになった．また，演じられない介護職員の存在や，《演じても利用者と職員間に相性がある》ため，介護職チームで対応することがわかった．介護職員は利用者との 1 対 1 の関係だけでなく，集団生活を意識し，周囲の他者（利用者や職員）にも配慮した役割を演じていた．他職種は，介護職が近い距離で人と関わることを得意としており，個性を活用して演じていると認識していた．さらに，メンタルヘルスケアや適切な評価の必要性を感じていた．利用者は，介護職に，双方向のコミュニケーションや固有の関わりを求めていた．

＜考察＞介護職員は，利用者との相互行為によって生じる‘私’の役割を感じ取り，その役割を果たすために演じていることが分かった．利用者の求める親密性と職員としての立場との狭間で，介護職員は「ゆらぎ」を感じるが，管理者から強制されることなく，状況に応じた役割を判断していた．また，障害者施設における特有の環境から，介護職員と利用者との対等な関係構築と，介護職チームでの役割を即興的に演じられるように共通認識をもつことの重要性が示唆された．
＜結語＞施設という閉鎖的な環境で，利用者は職員としてだけでない重層的な役割を介護職員に求めていた．介護職員は個性を活用し，利用者が求める関係性に沿うように，利用者と固有の関係を構築していた．また，利用者との相互行為によって，介護職員は親密性と専門性に沿った‘私’の役割を獲得し，その役割を果たすために演じていた．相互行為によって生じる介護職員の役割は，利用者との 1 対 1 の関係を基本とするが，場面の状況や周囲の他者との関係によって変容することが分かった．

審査結果の要旨

博士論文のテーマは、申請者自身の障害者施設での介護職員としての経験と介護実習指導における実習指導者等とのやり取りの中から、介護現場における特有な行為に着目し研究テーマとして設定したものである。介護福祉分野において、現場における文化や実践を学術的な視点から取り上げ、実証した研究は非常に数少ない現状にある。このような背景の中で、申請者の博士論文は、介護現場における「暗黙知」を丁寧に掘り下げ、独自の視点である「演じる」という概念を通して考察している点で、非常に独自性の高い研究成果を示していると言える。以下、博士論文として評価できる点について説明を加える。

第一には、質的研究方法における多様な視点からのデータ収集と、丁寧な分析である。研究方法としては、合計 29 人の対象者への個別インタビューデータを丁寧に質的記述的に分析していく手法をとっている。インタビューの対象者は、障害者施設の介護職員だけでなく、介護職員以外の他職種、また施設利用者 7 人にもインタビューを実施しており、多様な立場にいる人から多くの生の声を収集することで、介護現場のダイナミックな関係をとらえている。また、参加観察法により、現場の相互関係の在り様についてもデータを収集して、インタビュー結果との整合性を確認している。

加えて、申請者が施設職員や大学教員として勤務する中で培ったネットワークが生かされ、研究に厚みを加える結果となっている。この研究テーマは、いわゆる現場感覚が必須であり、常に現場の介護職や利用者との確認作業を行うことで洗練されていくと考える。このような一連の研究プロセスを支える現場の支援者の存在については、申請者が培ってきた信頼関係に基づくネットワークが生きている印象があり、まさに現場感覚の中から生み出す実証的な研究の例であるとも言える。

申請者の博士論文における新しい知見として、障害者施設の介護職員は、利用者との相互行為の中で‘私’の果たす役割を感じ取り、専門性を加味した職務上の役割を果たすために

演じていることが示されている。また、介護職員と利用者との関係性は、長期的関わりの中で醸成された親密性と固有性をもつという特徴があるが、状況に応じて「演じる」という行為を多様に発動させていることや、障害者施設という特有の場（＝舞台）で、介護職員と利用者以外の他者（＝観客）を意識して共に演じているというユニークな視点も示されている。博士論文審査会では研究概要について、申請者がプレゼンテーションを行った後に、質疑応答を行った。研究で得られた知見についての意見や質問の他に、介護福祉現場や教育への研究成果の活用方法や、今後の研究の方向性について質問が出され、申請者の回答から今後の進め方として発展性があることを確認した。

以上により、審査員 4 名は、博士論文の審査方法及び審査基準に則り審査した結果、当該論文は審査基準を満たしており、本学人間生活学研究科社会福祉学領域における優秀な論文に値すると判断した。